

# ジョージ・オーウェルと彼の時代

野村夏治

## George Orwell and His Age

Natsuji NOMURA

### 『なぜ私は書くか』と『チャールス・ディケンズ』

ジョージ・オーウェル（1903～50）はGHQ推薦の作家であった。昭和24年5月永島啓輔訳『アニマル・ファーム』が出版されたが、その表紙には、これはGHQによる第一回翻訳許可書であるとうたっている<sup>1)</sup>、という。この本と『1984年』とが彼を有名にしたが、彼の名声と影響は彼の死後ずっと大きくなり、今も小さくなる気配を見せていない。

彼は、スペイン内乱についての政治とジャーナリズムを告発した『カタロニア讃歌』（1938）を書いてから『1984年』（1949）に至るまで一貫して共産主義の鋭い批判者として終始した。「自分の心情に対しても、また自らコミットした思想に対しても、ストイックまでに誠実であろうと努めたために傷つき、それでもなお誠実であることをやめようとしなかった作家の素顔だ……オーウェルは真実を語ることしか関心がなかった」（『カタロニア讃歌』米国版に付せられたライオネル・トリリングの小論<sup>2)</sup>。彼が常々口にしたのは「人間らしさ」であり、彼の本領は本質的な人間性への信頼にあるということが死後になって認められるようになる。彼は美しい風景描写（『ビルマの日々』などに見られる）には優れていたが、恋愛が描けず、恋愛を小説の中の一挿話として持ち出すこともできない作家であった。しかし後年になって『トリビューン』（民権擁護者の意。左翼雑誌）への寄稿エッセイや、『チャールス・ディケンズ』（1940）等の評論に筆のさえを見せ、ようやくにして自らの進む道を見出し、寓話小説『動物農場』（1945）に至るのである。

彼のエッセイ 'Why I Write' が発表されたのは1946年夏である。彼はこの中で作家が作品を書く動機として、1. 純然たるエゴイズム 2. 美への情熱 3. 歴史的衝動 4. 政治的目的 を挙げているが、「私は四番目の動機よりも最初の三つの動機が強いはずの人間である。平和な時代であったら、華麗な、あるいは記述的な作品を書いていたであろうし、政治的忠誠心などはほとんど意識することさえなかったであろう」と書き、さらに、「五年間自分には不向きな職につき（ビルマでインド帝国警察に勤務）、それから貧乏と挫折感を味わった。このことが権威に対して私がもともと持っていた憎しみを増した……そこへヒットラーが登場し、スペイン戦争が起こり」、もはや彼は自分の生きている時代に無関心でいられなくなる。「1936年以来、私が本気で書いたのは、どの一行も、直接間接に全体主義に反対し、私が理解する意味での民主的社會主義を擁護するために書かれている。現在のような時代にこうした問題を書かずにすまされうるなどと考えるのはナンセンスである」、「わたしの出発点は、常に一種の党派性、つまり不正をかぎつける感覚である」、「はじめて政治的目標と芸術的目標の融合に挑戦したのは『動物農場』のときであった」と書いている<sup>3)</sup>。

オーウェルの書いたディケンズ論によると、ディケンズはプロレタリア作家ではないし、普通に使われている意味での革命的な作家でもなく、彼の社会批判は専ら道徳的なものであるという。「注目すべきことは、ディケンズの姿勢が根本において破壊的でさえない、という点である」、「彼の目標は社会ではなく、人間性だからである」<sup>4)</sup>。彼の物語の中心になっているのはほとんど中産階級の世界とあってよい。彼は社会改革を唱える革新思想の持ち主のように思えるが、彼が作品の中で読者に訴えようとした思想は、要するに、「人々が行いを正しくすれば、社会も正しくなる」ということを言っているにすぎず、「大人になってから読めば、だれしも彼の限界を感じられないではいけないのだが、それでいて、彼生来の心のやさしさが依然としてそこにあるのであり、このことがこの作家の人気の秘密であろう」とオーウェルは言う。

ディケンズの書いた小説の多くは少年時代の回想から始まる。彼の描く子供の姿には哀感と理想化の二面がある。「彼は子供の心の内側にも外側にも立つことができた」とオーウェルは言う。ディケンズの心のやさしさについてはこれまでどの批評家によっても論じられなかったものであり、ディケンズの描く庶民の生まれながらの人間らしさが彼の業績であるとした点にオーウェルの人柄がよく表われているように思われる。

オーウェルは生涯にわたってかなりの批判を表明しながらも英国の労働党のいずれかのグループを支持し続けた。彼はまたありとあらゆる毒舌を吐きながらも、自らの国土に対する愛情としての愛国心と、自国が当然に他国より優越していると主張するナショナリズムとを注意深く区別した<sup>5)</sup>。反ユダヤ主義もそうしたナショナリズムの最たるものの一つである。彼は『英国におけるユダヤ人差別』、『ナショナリズム覚え書き』（ともに1945年）を書いて、ユダヤ教徒への市民権付与に伴って生じてきた根強い反ユダヤ主義と戦い、彼の主義主張を貫いた。「彼が多くのユダヤ人をひきつけたことは、彼の葬式に多くのユダヤ人が参列したことからうかがわれる」<sup>6)</sup>という。生前どの教会にも属さなかったオーウェルが、遺言どおり国教教会の儀式にのっとって（火葬ではなく）埋葬されることは容易ではなかった。

イギリス文学の一つの特徴は文学と政治が割合密接に結びついていることであるが、彼が活躍した30年代は正に「政治の時代」であった。

### 『象を射つ』と『ビルマの日々』

オーウェルの本名は Eric Arthur Blair である。彼は自分の出身を上層中流階級の下と規定しているが、英国の支配階級（上流及び上層中流階級）のもつ偽善性を徹底的に嫌った。しかし彼は、オックスフォードやケンブリッジで学ぶことを当然としている階級よりは明らかに下の階級の生まれであった。父方の祖父は牧師であるが、若い時インド陸軍に勤務していたし、父はインドアヘン局の下級官吏であった。彼は1903年インドベンガル州で生まれ、翌年母と英国へ帰り、父は1911年退職後帰国した<sup>7)</sup>。彼は予備小学校からイートン校へ進むが、そこでの成績が悪いため大学へ進む奨学金をもらえない可能性がなく<sup>8)</sup>、卒業するとインド警察の試験を受けて1922年10月19歳でビルマ（当時インドの一部であった）の警官となる。

彼が在学した予備小学校（8歳～13歳）は金持の子弟が多かった。彼は授業料半額免除の生徒であり、イートンへ入学して校名を高めることを期待されていた。彼は孤独で、何かうしろめたい気持ちがぬけることがなかったらしい。「私は金がなく、弱く、醜く、人気がなく、慢性の咳があり、臆病で、悪臭を放っていた」<sup>9)</sup>と書いているが、彼が少年時代の思い出を書いたエッセイ『喜びはあれほど大きかった』（1953）は死後発表された作品で、疑問の点が多く、フィクションであると評する人もいる。しかし、すでに述べた『なぜ私は書くか』の動機のうち

ちの第一番目の純然たるエゴイズムについての中に「子供のころ自分を馬鹿にした大人を見返してやりたい」という文があり、これは彼自身の体験に根ざしていると考えないわけにはいかない。予備小学校のことはさておき、彼がイートン校の生活によってまさしく社会批評家がつつにふさわしい態度を身につけ、権威に対する懐疑を強めていったようである。なお、彼はイートン校についてのエッセイは書いていない。

警官という仕事は彼を体制側に組み込んでしまう。ビルマでの生活は悩み深い五年間であった。エッセイ『象を射つ』(1936)の書き出しは、「南ビルマのモールメインでは、私はたくさんの人から憎まれていた」であり、その自分がいつのまにかそういうビルマ人の味方になってしまっていること、さらに、帝国主義は悪であり、「一日も早くこんな仕事をやめたいと心に決めている」、「自分の仕えている帝国への憎しみと、私の職務を遂行不可能にしようとする意地悪な畜生どもに対する激怒との板ばさみになって私は身動きがとれなくなった」と書かれている。このエッセイのクライマックスは、かたずをのんで見守る群衆の眼の前で、ただ彼らの笑いものになりたくないという理由で彼が不承不承象を射つところである。「ライフルを手にしてそこに立ったこの瞬間初めて東洋における白人支配のむなしさ、愚かさが分かった」<sup>10)</sup>と書かれている。彼のこの小作品を傑作であるとする人は多い。

オーウェルは辞職して帰国し、作家を志望し、いろいろな苦難を味う。ロンドンとパリでの浮浪生活を1930年11月書き上げたものが『ロンドン・パリどんだ生活』として1933年11月やっと出版される<sup>11)</sup>。この原稿を書き終えるとすぐ最初の長篇小説『ビルマの日々』に取り掛かったらしい。そして1933年完成したが、在住イギリス人を攻撃しているこの小説は名誉棄損で訴えられる可能性があるということで、その出版を第一作を出版した出版社から断られてしまう。しかし、幸運にも、その折ロンドンに来ていたニューヨークの出版社の編集主任の目にとまって初版はニューヨークで1934年出版される<sup>12)</sup>。

『ビルマの日々』の主人公は、ビルマに住んで15年になる35歳のフローリーという名のイギリス人材木商人であるが、この人物は多くの点でオーウェルの考え方を代弁している。彼は白人の旦那方(sahib)をひそかに軽べつして、白人のインド支配は白人の責務などと言っているが、その実は豊かな資源を略奪しようとしているにすぎないと考えている。彼は白人のなかに真に打ちとけて良心を分かち合える人間には会えない。現実のオーウェルも、ビルマ生活において、自分の良心は常に周囲の白人に隠しておかなければならなかった。オーウェルは、ビルマ語がよく話せたという。

フローリーは長いビルマ生活で現地人の考え方に共感できるようになっていた。彼の唯一の親友はインド人医師である。この医師を現地人としてイギリス人のクラブに加える件で、若いビルマ人の治安判事は悪らつな計略をめぐらしてこの医師を蹴落とす。フローリーは結局自暴自棄になってピストル自殺をとげてしまうが、この最後の瞬間に、彼の現地人への同情心自体が実は白人の思い上りにすぎなかったことを知らされる。この小説で、オーウェルは、白人の圧政者側に組する被支配民族の俗物根性を実に巧みに描くことができたのに、ヨーロッパ人を冷静に描くことはできなかった。フローリーのビルマ人情婦に対するひどい仕打ち、親友を見捨ててしまう卑劣さは、E. M. フォースターの『インドへの道』(1924)の主人公がインド人の親友を白人社会の攻撃から身を挺して守ったのとはきわめて対照的である。『インドへの道』でも、人種としてのイギリス人とインド人は、ついに理解に至ることができないが、救いは太母的なイギリス人の老婦人ミセス・ムーアの、直観的包容力に見出される<sup>13)</sup>ようだ。

ある経済学者は、英国のインド経略について次のように書いている。「軍人に限らず役人に

しても、インド勤務はべらぼうに高い。その高い本俸にすでに述べたような手当や年金がつく……インド勤務を志願する軍人や役人がわんさと押し寄せたのも道理である。相続にあぶれた貴族の二・三男は高級官僚や将校に、落ちぶれた中産階級の子弟は下級官吏や士官にそれぞれ所を得て職にありつけば、一生食いはぐれがないどころか、本国に帰っても悠々と遊んで暮せる。」<sup>14)</sup>オーウェルの父が彼のビルマ行きを望んだとされるのもゆえなしとしない。しかも、これらのイギリス人に支払われる費用はすべてインド人民が負担させられたのである。

インド生まれの小説家で詩人のキップリング (1865~1936) は、「東は東、西は西、白人の苦しみ」とうたい、英帝国主義を賞揚し、インドで働くイギリス人役人、兵士、技術者を賞讃した。オーウェルは小論『ラドヤード、キップリング』(1942)の中で彼を「すぐれた悪い詩人」と評しているが、彼に対する評価は意外に高い。それは、キップリングと同様に、彼にも鉄道建設に骨身を惜しまず働く責任感あふれる人々に対する共感があったからである。彼のことをオーウェルは「この愛国者ほどイギリスに辛らつなことを言った者も少ない」と評している。

彼は生涯にわたって中産階級を非難しながらもやはりその一員のままであってそこから真の意味で抜け出ることができなかったが、これはむしろ当然のことであった。自らの意識に巢食う中産階級を主人公のゴードンが嫌い、軽べつし、自分の意識から圧殺しようとしても、葉蘭と同じように「しおれ病みながら生き長らえる」と書いたのが『葉蘭を守れ』(1936)である。ゴードンの貧乏、苦悩、屈辱がオーウェル自身のものであったことは明らかである。『ウィガン波止場への道』(1937)で彼は中産階級の左翼のインテリをば倒し、機械文明を攻撃した<sup>15)</sup>。これは彼らが労働者と接することなく社会主義を説き、機械化を唱導していたからである。オーウェルのこの反機械化のテーマは後に『1984年』において展開されることになる。なお、この『ウィガン波止場への道』はレフト・ブック・クラブ(36年設立)による左翼出版物の廉価配本であった。この背景にはレジャーの拡大、読書習慣の普及があった。これは、1935年ペンギンブックス、1937年ペリカン・ブックスが刊行されたことからもうかがわれる<sup>16)</sup>。

### スペイン内乱と『カタロニア讃歌』

1930年代の文学の大きな特徴は「歴史意識」「時代意識」「政治参加」であり、政治参加を中心主題として展開された文学である(小野協一)、といえる。まず当時の世界状況から始めよう。

ヘミングウェイは「失われた世代」の一人としてパリ等における第一次大戦後の不安と幻滅、虚無感を見事に描いているが、各国が平和と自由を守るために続けていた情勢を一変させたのは1929年10月29日に始まる経済恐慌であった。いわゆる「悪魔の十年間、赤い十年間」の初まりであった。恐慌はたちまち世界各国に及んで国民経済を破たんさせ、自由主義的な社会秩序の維持を危険に陥れた。各国は自給力を欠いたが、民主政治の基盤がまだ弱い後進資本主義国家において影響は特に深刻であり、ファシズムの急速な台頭を招くに至った。この間リベラリズムやマルクス主義はなんらなすところがなく、ヒットラーが1934年政権を握る。イギリスでは1931年労働党が大敗する。一方ではロシア革命後の共産主義の成行きが不気味であり、他国に影響を与え始めていた。イギリスの17世紀以降の伝統は勢力均衡の政策であるが、この政策を維持してチェンバレンは対ドイツ宥和政策をとる。彼はソ連に不信感をもっていたのである。(彼を引き継いだチャーチルはこの政策に反対した)

1936年スペインに人民戦線政府が成立したが、同年7月18日独伊から武器、兵器の支援を受

けたフランコ将軍が反乱を起こし、政府軍を圧倒した。この事態に英仏は不干渉、ソ連は表面は不干渉を装いながらひそかに政府軍を助けた。コミンテルンの呼びかけに応じた義勇軍は4万人と言われる。しかし、反乱軍の優勢は続き、1939年10月フランコは国民政府を樹立した。

スペイン内乱は知識人にとっては一つの踏絵となり、幾人もの作家や詩人がこれに参加したが、例えばオーウェルのように自ら銃を取って戦い、あるいは、W. H. Auden (1907~73)のように詩を書いて同志を励ました。

オーウェルはイギリス独立労働党に入党(1938年6月~翌年9月)し、党から紹介状をもらい、新聞記者としてスペインに入国するが、現地の革命的気分感動し、銃を取って戦いたくなり、入隊したのが偶然にもPOUM(マルクス主義統一労働党)であった。彼は6か月間市民兵として戦った。その報告『カタロニア讃歌』は、彼がイタリア人義勇兵と出会うところから始まる。「初めて会った人にこんな愛情を感じる不思議なこともある。まるで彼の魂とぼくの魂が一瞬のうちに言葉や習慣の障壁を乗り越えて、親交を結んだみたいだった」<sup>17)</sup>と書かれている。彼はバルセロナではだれもが互いに同志愛と敬意を示し合っていることを知る。この6か月は彼に他のどこにおいても知り得なかった仲間意識を教えた。彼は名もない人間同士の心のふれあい、彼のいう「人間らしさ」を通じて民衆への連帯感を強めた。しかし一面では彼はスペインがアナキストの天下であることを知らず、政治的にはまるで子供同然であった。

当時スターリニズムの指令下にあったスペインの共産党はフランコ軍と戦うよりも、アナキストの組織CNT(全国労働者同盟)やオーウェルが参加したPOUMをせん滅することに熱心であることを彼はようやくのみ込めてきた。カタロニアを本拠とするPOUMを「トロッキスト」とか「フランコの手先」と称してその組織を解散させ、幹部を逮捕した。人民戦線内閣を組織したガバリエロ首相は共産党及びソ連顧問団と対立して退陣を余儀なくされる事情が、このルポルタージュのクライマックスである<sup>18)</sup>。カタロニアでの急進的な労働者革命の波がフランスに及んで、ソ連とフランスとの同盟にき裂が生ずるようなことがあっては困るからであった。彼は、これがきっかけで、スターリン主義とヒトラー主義(彼は両者を全体主義と表現する)の間の類似性を認識するようになる。

オーウェルは首を銃弾で射貫かれるが、九死に一生を得る。除隊の許可を受けた直後POUMは非合法の宣告を受けるが、彼は後から来ていた妻アイリーンと逃亡する。夜は教会の廃墟に隠れ、昼間は観光客のふりをして大通りを歩き、3日間逃亡した後列車に乗り込み、食堂車に堂々と座って国境を越えた<sup>19)</sup>、という。1937年6月のことであった。

カタロニアで何が起きているか、その正しい報告を英国の新聞で公表することはまず不可能であった。当時のジャーナリズムではその報告はファシストの宣伝に利用されるという態度であった。1938年4月やっと出版されたこの本はさざ波さえ立てることができず、1500部印刷して6か月で683部売れたが、1950年に彼が死んだときも初版本が残っていたという<sup>20)</sup>。しかもこの本のため彼は左翼陣営のなかでも「好ましからざる人物」とされてしまう。オーウェルにしてみれば、自分の眼で見たものを書いたに過ぎず、特に、オーウェルはそれ以外に道を知らない人間であった。「オーウェルは他の人々より正直であった。彼はマスクをつける能力がなかった」<sup>21)</sup>自分の所属する集団なり社会がある一つの方向へ向いているとき、その流れに逆らって自己主張をすることができる人が実に少ないのは、洋の東西を問わないのである。

当時は人民戦線という絶対善を守るためであれば虚偽が許されるといった時代であったと言うべきであろう。マドリードが陥落してまもなく1939年4月独ソ不可侵条約が締結される。「スターリンとヒトラーの結託は、さながらこの世の終末を思わせるような事件であった」

(スティーヴン・スペンダー『30年以後』)<sup>22)</sup>この条約を機にフランスの作家アンドレ・マルロー(1901~76)は共産党と訣別する。まさに混迷を極めた時代であったが、オーウェルは終始ひたすら自由のはく奪と抑圧、人間性の無視を嫌悪する叫びをあげ続けたのである。

『カタロニア讃歌』は、その題名どおりたとえ短期間でもスペイン人が作り上げた社会主義的社会への讃歌である。しかし同時にこの題名はパラドックスであり、彼がスペイン内戦で体験した幻滅の証言でもある。彼はこの本を機に共産党及びそのシンパと縁を切ることになる。

彼と同じようにスペイン内戦に関係した幾人かの詩人、作家のうちの3名を取り上げる。オーデンは1936年『見よ、異邦人よ』という詩集を書いて士気を鼓舞した。翌年1月彼はスペインに行くが、2か月で帰英する。彼も『カタロニア讃歌』に書かれている内戦の現実に失望したのである。彼は帰国後『スペイン』という詩を発表したが、その後はその体験について語ろうとせず、とっくの昔に捨て去ったはずのキリスト教が自分のなかにまだ根強く生き残っていることに気づく。後米国へ移住して政治から離れ、宗教的になる。オーデンの詩の正典ともいえるべき1966年版の『短詩集』から「スペイン」は不正直な詩として追放される<sup>23)</sup>。オーウェルはこの「スペイン」の中の「必要な殺人(の罪の意識的容認)」という言葉が『鯨の腹の中で』(1940)で取り上げ、「こんな言葉が書けるのは殺害がせいぜい言葉でしかない人間だけである」と彼を非難した。オーデンは後になってその語を「殺人の事実における罪」と訂正した。

「陶酔から幻滅へ」というコースはこのようにオーウェルだけのことではなかった。米国の作家ドス・パソス(1896~70)は自らの体験を『一青年の冒険』(1939)に書いたが、この主人公のアメリカ青年は国際義勇軍に応募してファシストと戦うためにスペインに渡るが、すぐさま「トロッキスト」に仕立てあげられて捕えられ、非公式の死刑宣告に等しい任務を果たすために釈放される。ハンガリー生まれのイギリスの作家ケストラ(1905~83)は、スペイン内戦が始まると共産側の特派員として活躍するが、ファシスト軍に捕らえられ、危うく銃殺されそうになる。この時の経験を書いたのが『スペインの遺書』(1938)である。彼もPOUMへの同情を禁じ得ず、その後転向してソヴィエトの暗黒政治を暴露した『真昼の暗黒』(1941)を書く。オーウェルの『アーサー・ケストラ』(1944)という小論は、同時代の苦難に悩んだ一人の作家に対する彼の共感と理解を伝えている。二人は親友となった。

### 『動物農場』と『1984年』

『動物農場』はスターリン型独裁政治に対する風刺的寓話である。革命が成功した後、新しい権力が再び体制化していくという悲劇的な運命に対する批判であり、『1984』(1949)は未来小説の形を借りて全体主義支配の恐怖を描いたものである。

オーウェルはBBCに1941年8月就職し、インド向けの放送の仕事(知的な放送であった)を担当するかたわら、『ホライズン』や『トリビューン』に寄稿した。1943年11月BBCをやめて後者の雑誌の文芸編集長になり、12月から1945年2月にかけてコラム「私の好きなように」に毎週定期的に広く話題を取り上げて書いた。このコラムの大半は40年を経た今日でも十分読むにたえるものである。彼の取り上げたテーマは、自然に対する愛情、本と文学に対する愛情、大量生産に対する嫌悪感、知識人への不信任感、反帝国主義と反人種主義等々であった<sup>24)</sup>。

彼が『動物農場』の構想を最初に持ったのはスペインから帰った年であった。『カタロニア讃歌』が完全に無視されたので彼はソヴィエト神話の実体を暴露する方法を模索してきた。彼は1943年11月から3か月間文字どおり心血をそそいで翌年2月完成した。しかし英国の出版社三社に断われ、出版のめどがたたなかったので、「四つの出版社に断われた」という前提

で一度は私家版の私的な序文「出版の自由」(1971年まで行方不明で、1972年に発表)<sup>25)</sup>を書き終えていたがその必要がなくなった。四つ目の出版社が引き受けてくれたからである<sup>26)</sup>。彼にとって幸いなことに歴史の流れが変わりかけていて、この本が出た1945年8月には英米とソ連の対立がようやく顕在化して、翌年8月アメリカで出版(20回近く断られた後)されるとたちまち50万部を売りつくしたという。

イギリス人読者は彼が『トリビューン』派の社会主義者であることを知っていて、その事実には照らして『動物農場』を読んだのである<sup>27)</sup>が、彼に対しこの小説の風刺のあいまいを出版直後に警告した人もあった。寓話形式はこのような主題を作品化するための技法であり、このためこの小説は外国語に容易に翻訳され、広く世界のどんな階層の人にも読まれる作品となった。事実この作品はソ連の歴史と関連づけなくとも物語として楽しく、起承転結がはっきりしていて、読者をぐいぐい引っ張っていく魅力がある。動物が反乱を起こして人間を追い払い、動物の手で農場経営に励むあたりまでは建設的な明るさとユーモアに満ちあふれている<sup>28)</sup>。

『動物農場』における運動はメジャーじいさん豚(レーニン)の演説から始まり、その原理を箇条書きに要約した七戒を作る。オーウェルの機知はこの七つの戒律の字句の一つ一つに躍動している。他の動物は指導者である豚に比べると勤勉で正直であるという美点を持っているが、知能が低いためにろくに字が読めず、記憶力も弱い。だから七戒が次々と加筆され、巧妙に変えられていってもはっきり抗議もできず、豚に有利に変えられてしまう。三頭の豚(スターリン、トロッキー、ベリヤ)は計画にたけ行動力に優れている。こうして豚が権力を握り、他の動物に君臨し始め、血なまぐさい粛清が行なわれ、反乱以前よりもひどい圧政になっていく。よく知られているのは、中心のスローガン「動物はすべて平等である。しかしある動物は他の動物よりもっと平等である」や、羊の大合唱「四本脚は善、二本脚は悪」などである。なお、オーウェルは、ロバなどの労働者階級は善良であるが無力なものとして描いている。ところで、風刺文学はイギリス文学の特徴的な一面であり、『動物農場』も『ガリヴァー旅行記』と同じくイギリスの散文の正統につながるといえよう。

『1984年』の主人公ウィンストンは真理省で働く役人で、その仕事は歴史の偽造である。党が何かの決定をすると、それに都合の悪い文献をしらみつぶしに捜してその文章を書き改めるか、削除してしまう。このようにして過去の事実そのものを党の決定に応じて変える。この仕事に対する彼の疑惑がやがて彼を破滅に導く<sup>29)</sup>。彼は同じように自分の仕事に興味を持ってないジュリアという女性と親しくなるが、党の拷問にあって彼女を裏切ってしまう。

この小説の舞台であるオセアニア国では、党の三つのスローガンは、「戦争は平和なり。自由は隷従なり。無知は力なり」であって、その政治哲学はこのような二重思考に代表される非合理主義である。ウィンストンは日記に「自由とは2プラス2が4になると言える自由である」と書くが、拷問にかけられ当局者の言うままに「 $2+2=5$ 」と叫ぶようになる。大演説会の場面では、演説者が敵国を非難しているのが突然敵が味方に、味方が敵になってしまう異変が起きる。独ソの和解から考えられたものであろう。開高健は、「どこでどう泣いていいものやら、読んでいてただただ途方に暮れるばかりの底知れぬやりきれなさに事態を持ち込んだ」、「体制そのものが独裁者であることを痛感させられる；ありのはい出す穴もない巨大社会の悪夢の再現」<sup>30)</sup>と評している。この不気味な本から、一人の人間として自由に思考し行動しうる世界を死守しようとするオーウェルのひたむきな姿勢が感じとられる。

『1984年』に登場する道具立てとしては、スピークライト(口述すると印刷された文字となって出て来る装置)とか、テレスクリーン(支配者が自分に都合のよい情報を意のまま流して

街頭、職場、家の中どこでも国民生活を監視できる）等がある。A. ハックスレーの『素晴らしい新世界』（1932）では科学と機械文明が個人の人間性を抹殺する未来を空想しているが、その同じ状況を政治体制が作り出しうることをオーウェルは予言しているといえる。この作品に見られる科学の道具立ての不十分さは、彼の反近代化、反機械化の志向が彼の思想の基盤的な要素とあってよい<sup>31)</sup>ことから理解できる。彼のこの志向は『空気を求めて』（1939）にはっきりと見られる。これは警告の小説であって、空気を吸って元気を取り戻すのは魚であるが、自然に帰ることによって人間性が暗黒と抑圧から立ち上がってくることができるとい希望<sup>32)</sup>が示されている。彼は終生牧歌的懐古主義から脱し得なかったといえよう。なお、この作品に見られるスローガンの世界、鉄条網、秘密の監房などは『1984年』を予見させる。晩年の彼はこの『空気を求めて』と『ビルマの日々』以外の小説（『牧師の娘』と『葉蘭を守れ』等）の再版を禁止した<sup>33)</sup>、という。

オーウェルは1950年1月咯血して死んだ。享年46歳であった。『1984年』は1948年11月完成し、翌年6月出版されるのだが、肺病のため症状は一進一退していた。秘書が見つからないため原稿を自分でタイプしなければならず、校正をするだけの体力しか残されていなかった。

作家は、自分あるいは他のだれかをモデルにし、またはそれらをもとにして想像上の人物のイメージを作り上げながら人間性の深い真実を引き出し、特定の個人を越えた普遍性、歴史性に迫ってゆこうとする。「人間の現実」に密着しながらその内面や状況を掘り下げてゆく形で働く想像力と、現実には全くあり得ない空想や幻想の自在な展開という形で働く想像力と—この相対立した二つの方向があるが、実際にはこの二つの方向がそれぞれの内部では相互に深くからみ合っている面がある……いわゆる日本の「原爆文学」に描きだされた現実の地獄の姿は、源信やダンテの想像力をはるかに越えている。また、その逆に『1984年』という逆ユートピア小説で描いた空想上の地獄のイメージは、その後の世界各国で露呈することになった次のような事実からして、作家の空想のほうが現実以上に現実的だったという面があることを示している。—社会主義諸国の多くでは、社会主義官僚の支配が社会主義そのものを深刻に押しゆがめている—こういう今日の世界的な現実、20世紀後半の人間とその存在にとっての最大の問題の一つであり、想像力によってこの主題との格闘に向うことは現代文学の基本の要求の一つとなっている<sup>34)</sup>」のである。

## 時代と文学

文学が時代と社会の反映であることは言うまでもない。「新たな精神的世界には、ある社会的状態が対応している」（ヤスパース）文学は言うまでもなく精神的世界に属するものである。

文学は、ある程度、自らの聖域から踏み出しても現実とかかわるべき接点を見出さねばならない、という方向へ駆り立てられるということは、オーウェルの事例のほかにカフカの『変身』やサルトルの『嘔吐』の中に端的に捜すことができる。「書いたことで世界の何をあらわにしようとしたのか、それによって世界にどんな変化をもたらそうとしたのか、そういう仕方での自己のアンガージュマンをどのように自覚するのか、というサルトル的な問い（サルトル『文学とは何か』）も、この意味では出てこざるをえず、それを回避することはできない<sup>35)</sup>

しかし、また、一方では、芸術を芸術であらしめるもの、文学を文学であらしめるもの、人が文学から学びとるべきものは、時代と社会を越えた人間性の啓示である。このような文学のもつ二つの面について触れている二つの文を引用しよう。



「ダンテやシェイクスピアのような詩人は、ある意味では確かに時代の子であり、政治思想家でもあったが、彼らの経験には人間の社会的利害を全く越えたところに達するような超絶的な側面がある。社会は彼らのあとについて、特定の歴史的時代の関心事の全く外にある、人生の普遍的性質についての光輝く啓示に浴するものであって、その意味で社会は彼らによって高められるのだが、しかし彼らの啓示は決してその社会の希望的思考の単なる投影ではない。(スティーブン・スペンダー『裏切った神』(1949)<sup>36)</sup>

「もともと、どんな人間も必ずどの時代かのどの階級かの具体的な歴史的な存在である以外にないのと同じく、文学もまた、具体的な歴史的な存在としての作者によってつくられる以外になく、その描く対象も同様で、どんなに空想力をはばかせてもそれはそのパン種子やその素材やの歴史性を免れない。空想力において歴史性を越えようとする場合さえ、そういう仕方では歴史性が貫かれる。しかし同時に、そういう歴史的な具体性において示されるのは人間性そのものであって、人間性の普遍のゆえに読者は時代をこえて作品を理解することができる、ということがここで改めて想起されることになる。もちろん普遍的な人間性はそれとして抽象的に存在することができず、常に具体的・歴史的な存在としてしか現われえない。文学は、そういう具体性・歴史性に即しながら普遍的な人間性の追求を実現する、という意味で、特定の社会・時代のイデオロギーでありながらそれを越えたものになるのである」<sup>37)</sup>

最後をしめくくる言葉として、五木寛之の『カタロニア讃歌』についての文章<sup>38)</sup>の一部を挙げたい。「私がオーウェルに何となく私的に親密な感じを持つのは、彼が外地派であることにもよる。彼は英国の植民地であるインドに生れ、その後も外国を転々としている。いわばデラシネの一人であり、そこに彼のインターナショナルな思想の根があるような気がしてならないのだ」

## 注

- 1) 小池 滋：小説家オーウェル，オーウェル著作集Ⅲ，394，平凡社（1970）
- 2) ジョージ・オーウェル，新庄哲夫訳：1984年，409，早川書房（1973）
- 3) Orwell, George: *Decline of the English Murder*, 184~187, Penguin (1983)
- 4) 小野寺健編訳：オーウェル評論集，54~56，岩波書店（1985）
- 5) クリック，B.，河合秀和訳：ジョージ・オーウェル上一ひとつの生き方一，10，岩波書店（1984）
- 6) 小野協一：ナショナル覚え書き，オーウェル研究4，特集エッセイ，3，オーウェル会，（1985）
- 7) 前掲書5）：41
- 8) 同上：160，162
- 9) ピーター・ルイス，筒井正明，岡本昌雄訳：ジョージ・オーウェル 1984年への道，49，平凡社（1984）
- 10) Orwell, G.: *Inside the Whale*, 91~96, Penguin (1983)
- 11) 前掲書5）：266
- 12) 同上：308
- 13) 川崎寿彦：イギリス文学史入門，162，研究社（1986）
- 14) 吉岡昭彦：インドとイギリス，167，岩波書店（1984）
- 15) 前掲書5）：396
- 16) 見市雅俊：二つのイギリス，河野健二編，ヨーロッパ——1930年代，207，岩波書店（1980）
- 17) Orwell, G.: *Homage to Catalonia*, 7, 8, Penguin (1982)
- 18) 清水幾太郎：現代思想，上，203，岩波書店（1980）

- 19) クリック, B., 河合秀和訳: ジョージ・オーウェル, 下—ひとつの生き方—, 32~34, 岩波書店 (1984)
- 20) 前掲書9): 84
- 21) 前掲書18): 215
- 22) 小野協一: スペイン内戦をめぐって, 177, 研究社 (1980)
- 23) 同上: 169
- 24) 前掲書5): 8, 9
- 25) 前掲書4): 345
- 26) 前掲書9): 125
- 27) 前掲書19): 241, 340
- 28) 高山誠太郎: ジョージ・オーウェルの笑い, 75, 金星堂 (1985)
- 29) 鶴見俊輔: オーウェルの政治思想, オーウェル著作集Ⅱ, 528, 平凡社 (1970)
- 30) 開高 健: 権力と国家, (小池滋) オーウェル著作集Ⅳ, 506., 平凡社 (1970)
- 31) 小野協一: 最終講義1984年について, 英米文学論集 (小野協一教授退官記念論集) 12, 南雲堂 (1984)
- 32) 前掲書19): 77
- 33) 前掲書5): 5
- 34) 小田切秀雄: 文学概論, 141, 勁草書房 (1986)
- 35) 同上: 250 なお, アンガージュマンは「積極的に政治や社会に参加すること」の意.
- 36) 前掲書22): 181 なお, スペンダーはこの本で彼が共産主義を捨てることになった経緯を告白した.
- 37) 前掲書34): 153
- 38) 五木寛之: オーウェルと私, (小野協一) オーウェル著作集Ⅰ, 葉, 4, 平凡社 (1970)